

利他行動における逆同調

—ボランティア参加場面を題材とした社会心理学的検討—

杜 佳霖

同調は社会生活において広く観察される現象であり、人はしばしば多数派の選択や判断に従うことで、不確実性を低減し、社会的承認を得ていると考えられてきた(Cialdini & Goldstein, 2004)。しかし近年、必ずしも人々が常に多数派に追随するわけではなく、あえて多数派とは異なる選択を行う「逆同調 (anticonformity)」と呼ばれる行動が注目されている。先行研究では、寄付行動などの向社会的行動場面において、自身の選択が多数派と一致していることを知った個人が、少数派へと選択を変更する逆同調行動を示すことが報告されている(Saito et al., 2019)。

この逆同調は、単なる反抗的態度や独自性欲求とは異なり、「多数派に偏った現状を是正しようとする動機」に基づいて生じる可能性が指摘されている。しかし、既存研究の多くは寄付行動を対象としており、より日常的で具体的な利他行動場面においても同様の現象が生じるのかについては十分に検討されていない。また、逆同調を引き起こす心理的要因についても、不公平感や共感性などが想定されているものの、その検証は限定的であり、多数派の規模そのものが逆同調にどのような影響を与えるのかについても未解明の点が多い。

そこで本研究では、利他的行動の一形態である「ボランティア参加場面」を題材とし、逆同調現象の再現性およびその心理的メカニズムを段階的に検討することを目的とした。具体的には、①ボランティア参加場面における逆同調の概念的再現、②不公平感や共感性などの心理的要因との関連、③多数派割合の変化に伴う逆同調行動の動態という三点に焦点を当て、3つの研究を行った。

【研究 1】

研究 1 の目的は、先行研究で報告された逆同調現象が、寄付とは異なる利他的文脈であるボランティア参加場面においても観察されるかを検討することであった。参加者は、地域イベントにおける 2 つのボランティア活動エリアのいずれかを選択した後、自身の選択が多数派または少数派であるという社会的情報を提示された。その後、参加者は初回の選択を維持するか、別のエリアへ変更するかを選択した。分析の結果、多数派条件において、少数派条件よりも選択を変更する参加者の割合が高く、ボランティア参加という利他的行動場面においても逆同調が生じることが確認された。すなわち、人々は単に多数派に従うのではなく、多数派に属していることを認識した場合に、あえて少数派へと移行する行動を取る可能性が示された。一方で、心理尺度を用いた分析では一部の効果が明確に検出されず、逆同調の背後にある心理的要因については、さらなる検討の必要性が示唆された。

【研究 2】

研究 2 では、研究 1 で確認された逆同調行動の心理的メカニズムをより精緻に明らかにすることを目的とした。研究 1 の結果を踏まえ、本研究では多数派条件のみに焦点を当て、参加者が逆同調行動を取る際の不公平感や情動的反応、状況認識などを詳細に測定した。また、測定時点や尺度の改良を行い、参加者の意思決定過程をより正確に捉えることを試みた。

その結果、多数派に属している状況において、応募者数の少ない選択肢へと変更する逆同調行動が再び頑健に観察された。さらに、不公平への情動反応、状況認識、ボランティアへの同情は選択変更を有意に正の方向で予測していた。選択を変更した参加者は、変更後に現状をより公平であると評価する

傾向を示しており、逆同調行動が不公平感の低減と関連している可能性が示唆された。

【研究 3】

研究 3 では、利他行動における逆同調の変化パターンを明らかにするため、多数派割合を 50%～100% の 11 段階に操作した探索的検討を実施した。

結果として、一般化線形混合モデルによる分析では、50%～65%の条件が 75% 基準と比較して変更率が有意に低く、100%条件も有意に低下した。Two Lines Test の結果、統計的に有意な逆 U 字型パターンは支持されなかった。

研究 3 の知見から、逆同調行動は多数派割合の増加に伴って単調に変化するのではなく、初期に急上昇した後に頭打ちとなる特徴が明らかとなった。また、100% 条件でも逆同調行動が維持されたことから、利他行動の文脈では「公平性の追求」が「孤立回避」よりも行動決定に優位に働く可能性が示唆された。今後は、各条件における主観的不公平感を直接測定し、因果関係を検証する必要がある。

【考察】

本研究は、利他行動における逆同調現象に着目し、寄付行動を対象とした先行研究の知見が、ボランティア参加という異なる利他的文脈においても観察されるかを検討した。研究 1 では、ボランティア参加場面において、多数派に属していることを知った参加者が、応募者数の少ない選択肢へと行動を変更する逆同調行動が確認された。研究 2 では手続きを改善した上で再検討を行い、逆同調行動の再現性が確認されるとともに、ロジスティック回帰分析により、不公平への情動反応が選択変更を有意に予測することが示された。研究 3 では多数派割合を段階的に操作し、逆同調行動が一定水準で頭打ちとなる非線形的な変化を示すことが確認された。

これらの結果から、逆同調は寄付行動に特有の現象ではなく、利他行動一般においても生起しうる可能性が示された。また、研究 2 の結果は、応募状況の偏りに対する情動的評価が、逆同調行動と関連している可能性を示唆している。さらに、選択変更後に公平性評価が上昇していたことから、逆同調行動は、状況をより公平であると再評価するプロセスと結びついている可能性がある。一方で、本研究は相関的デザインであり、心理要因と行動との因果関係については慎重な解釈が求められる。今後は、実験的操作を通じて、逆同調行動が生起する心理的過程をより詳細に検討する必要がある。(社会心理学)